

論文内容の要旨

氏名	段 静宜
論文題目	植物に関する慣用表現の認知言語学的研究 — 日中対照分析 —
要 旨	
<p>本論文は、認知言語学の観点から、日中両言語における植物に関する慣用表現とメタファー、メトニミー、等の修辞表現の分析に基づいて、言葉と認知のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。全体は6章からなる。</p> <p>第1章では、先行研究の問題点を考察し、新しい研究の位置づけを試みている。特に本章では、先行研究が (i) 主に植物表現の記述レベルの意味分析に限定されている点、(ii) 植物表現の文字通りの意味研究の域を出ていない点、(iii) 植物表現の分類が古典的カテゴリー理論を前提としている点を指摘している。本章では、以上の問題を踏まえ、認知言語学の視点から、本研究における植物表現の新たな研究の方向性を示している。</p> <p>第2章では、本研究の分析の背景となる認知言語学の理論的枠組み（特に、日常言語の概念体系の創造的なメカニズムの解明に重要な役割を担う認知意味論の基本的な枠組み）を概観している。認知意味論は、古典的な客観主義の意味論とは異なり、言葉の意味（ないしは概念）の創造は、人間の主観的なカテゴリー化に基づくという視点に立脚している。また、この種のカテゴリー化は、基本的に認知主体の五感、体験、運動感覚をはじめとする身体経験に基づくという立場に立っている。認知言語学の言語観は、人間と環境の相互作用に関わる経験的な側面を重視する言語観である。本章では、この認知言語学の枠組み（特に、その中核となる認知意味論の枠組み）に基づき、日常言語の植物表現の概念体系を特徴づけるメタファー、メトニミー、等の意味拡張のプロセス、イメージ形成のプロセス、ゲシュタルト形成、等の諸相を考察し、第3章以降の植物表現の意味分析の基本的な枠組みを提示している。</p> <p>第3章では、認知言語学の視点から、日中両言語の植物表現（特に、草木と花木の植物表現）に関わる漢字の構成のメカニズムを、形式と意味の記号関係に基づいて考察している。中国語では、植物に関する漢字の中では、草木を構成要素とする漢字がかなりの数を占めている。これまでの伝統的な植物表現に関する漢字の研究では、漢字の記号構成は、六書（i.e. 象形、指事、形声、会意、等）の構成要素である部首に基づく形式的な分類が中心となり、個々の漢字の意味生成のメカニズムに関する認知的な分析はなされていない。これに対し、本章では、植物表現の構成要素の中核をなす草木関係の漢字に注目し、このグループに属する漢字の意味生成のタイプを、(i) 図標的な有縁記号（icon）に基づく象形系の漢字類、(ii) インデックス（index）に基づく指事系の漢字類、(iii) 象形と指事の意味合成（semantic composition）に基づく会意系の漢字類に下位区分している。従来の研究では、植物表現に関わる漢字類を、このような意味生成の質的相違に基づく認知的分析はなされていない。本研究は、以上の分析にとどまらず、さらにこの種の下位区分（i.e. (i) 有縁性、(ii) インデックス性、(iii) 意味の合成性）に基づく漢字の意味生成</p>	

が、われわれの認知能力の中核をなす (i) イコン的なメタファー、(ii) 指示機能に根ざすメトニミー、(iii) 複合的イメージ形成の認知プロセスに基づいている事実を明らかにしている。

さらに本章の後半では、認知意味論の枠組みに基づき、日中両言語の植物表現のカテゴリー化のメカニズムを明らかにするために、従来の植物分類とは異なる新たな分析として、概念的分類、解剖的分類、プロトタイプの分類の三つの視点から、植物表現のカテゴリー化の諸相を明らかにしている。これまでの伝統的分類は、古典的カテゴリー論の集合／成員の関係に基づく分類が前提となり、上記の三種の視点からの植物のカテゴリー化の分析は試みられていない。これに対し本研究は、植物のカテゴリー化の認知プロセスには、上位レベル／下位レベルの関係からなる概念的カテゴリー化、全体／部分の関係からなる解剖的カテゴリー化、中心レベル／周辺レベルの関係からなるプロトタイプのカテゴリー化の三つの質的に異なる認知プロセスが関与している事実を明らかにしている。

本章では、以上の新たな分類の視点に基づき、集合／成員の関係に基づく従来の伝統的な分類は、本研究の上位レベル／下位レベルの関係に基づく概念的カテゴリー化の一種として再規定される。本研究で特に注目すべきは、他の二つのカテゴリー化（i.e. 解剖的カテゴリー化、プロトタイプのカテゴリー化）の存在である。この種のカテゴリー化に基づく植物の言語的分類の認知分析は、これまでの研究ではなされていない。本章では、この二つのカテゴリー化のうち、前者は〈部分〉／〈全体〉のメトニミーの認知作用に基づくカテゴリー化、後者は〈顕現特性〉／〈中核特性〉の差異化の認知作用に基づくカテゴリー化として認知的に区分している。

第4章では、認知意味論の枠組みに基づき、人間生活の諸相を植物の特性によって比喩的に叙述する言語表現のメカニズムを考察している。特に本章では、植物の基本カテゴリー（e.g. 草、木、等）、部分カテゴリー（e.g. 種、芽、花、葉、実、根、等）、及び植物の成長過程に関わる言語表現の具体例の分析に基づき、植物の概念領域から人間の人体領域、感情領域、精神領域、社会領域へのメタファー写像の認知プロセスを明らかにしている。日常言語のメタファーには、〈構造のメタファー〉、〈方向のメタファー〉、〈存在のメタファー〉という3種類の概念メタファーが存在する。本章では、この種のカテゴリー化の視点から、起点領域である植物の概念領域から、目標領域である人間の概念領域へのメタファー写像の認知プロセスを綿密に分析している。

例えば、植物の成長過程には、次のような段階（「種を撒く」、「芽が出る」、「花が咲く」、「実る」、「枯れる」といった成長段階）が関わっている。このような植物の成長過程に基づいて、人間の生活領域を叙述する言語表現（e.g. 「新しい分野に種が撒かれた」、「研究に芽が出てきた」、「IT企業が花盛りだ」、等の比喩表現）が可能となる。また、人間が成長する段階には次のような行為が関係する。幼児や子供の段階では、栄養を吸収して成長する側面に焦点が当てられ、成長してからは恋愛、結婚、出産、等の側面に焦点が当てられる。一方、花木の成熟を表す「花が咲く」、「結実する」等の表現の背景には、成人になる人間の成長の段階との〈構造的な類似性〉が存在する。従って、例えば「花が咲く」、「実を結ぶ」、「結実する」、等の表現は、人間の成長過程の諸相を叙述する比喩表現として使わ

れる。本章では、この種の花木に関わる植物表現の体系的な分析に基づき、日常言語の概念体系の中核をなす〈構造的メタファー〉のメカニズムの一面を明らかにしている。

本章では、さらに日常言語の概念体系を特徴づける植物の比喩表現として、〈方向のメタファー〉と〈存在のメタファー〉に関わる言語現象を考察している。前者の典型例としては、「散り際がいい」、「花と散る」、「巨木が倒れる」、「(裏街道の) 枯れ落ち葉」、等が考えられる。この種の比喩表現には、上から下への方向性の認知プロセスが関わっているが、その背後には、さらに下の方向は死の方向であるという認識が関わっている。(換言するならば、生物の死のプロセスには、倒れ、地に落ちるといった下の方向への移動の認識が関係している。) 日常言語には、この種の主観的な認識に根ざす〈方向のメタファー〉が広範に存在する。本章では、上記の植物表現を含む、この種の〈方向のメタファー〉の比喩写像のメカニズムの諸相を明らかにしている。

本章では、さらに植物の比喩写像のメカニズムには、〈存在のメタファー〉が比喩の見立ての背景として重要な役割を担っている事実を明らかにしている。例えば、「種を撒く」、「芽が出る」、「花が咲く」、「実る」といった表現は、日常言語において文字通りの表現として使われるだけでなく、学問の世界の進展や停滞を叙述する比喩表現 (e.g. 「新たな研究分野の種を撒く」、「彼の研究はまだ芽が出ない」、「その学問が実を結んだ」、等) としても使われる。この種の表現の背後には、(学問、研究、等の) 抽象的な概念世界の変化や状態を植物の世界の変化や状態に見立てる存在論 (ontology) に基づくメタファー (i.e. 〈存在論的なメタファー〉) が、修辭的な意味生成のメカニズムとして働いていることを示している。本章では、広範な植物表現の分析に基づき、この種の存在論に基づく比喩写像の認知プロセスとして、植物の人体領域への写像、感情領域への写像、精神領域への写像、社会領域への写像、等の認知プロセスの諸相を明らかにしている。

第4章までは、日常言語の植物に関わる慣用表現と比喩表現の分析が中心になっている。これに対し第5章では、認知言語学の視点から、詩的言語における植物の修辭表現の諸相を考察している。従来の言語学の研究では、植物の詩的表現に関する認知言語学の視点からの体系的な分析は殆どなされていない。本章では、詩的 (ないしは文学的な) 植物表現による自然描写や人間の内面描写の具体例を、認知言語学の意味論の下位モデル (i.e. 参照点起動の推論モデル、メトニミー写像、比喩写像、フレーム意味論、等のモデル) に基づいて分析している。

例えば文学の研究では、詩的言語で使われる「紅葉」、「桜」、「梅」、等の語彙は、春夏秋冬の季節との関連で使われる点是指摘されているが、前者の語彙が後者の世界を起動する連想の認知プロセスの詳細は明らかにされていない。本章では、この種の連想のプロセスを一般的に規定する認知のメカニズムとして、参照点 (reference-point) とターゲット (target) に基づく推論モデルによる分析を適用している。本研究では、この種の連想の認知プロセスの規定に際し、季語が参照点、季語が起動する時間領域が参照点の志向する支配領域 (dominion)、季語が使用される文脈に基づいて特定される季節がターゲットとして規定される。本章では、以上の参照点起動の推論モデルに基づく分析により、季語が具体的に志向する時間領域への連想プロセスの諸相を一般的に規定している。

植物から連想される意味の領域は、季節感に関わる用法に限られる訳ではない。本章では、季語の時間領域への連想プロセスの分析だけでなく、花言葉に関わる連想プロセスも、詩的言語の具体事例に基づいて綿密に分析している。基本的に「赤いバラ」は愛、情熱、等、「白いユリ」は清純、純血、等の意味に関係している。従来の研究では、この種の花言葉の連想的な意味は、記述レベルで列挙されるに留まっている。これに対し、本章では、認知言語学のフレーム意味論の枠組みに基づき、この種の花言葉の連想的な意味は、五感、体感、等に関わる語彙の経験的意味フレームと文化的意味フレームとの関連で体系的に見直されている。本研究で注目する経験的意味フレームは、言語・文化を越える人間の身体的、生理的な感覚に根ざす意味フレームである。この意味フレームの文脈では、心理的興奮 (ないしは感情的興奮) と身体の色々の状態は連動している。また、この経験的な意味フレームの文脈では、ある対象の白さ、清潔さ、等の感覚は、精神的な純粋性の感覚と連動している。上記の、「赤いバラ」「白いユリ」の詩的言語のテキストにおける連想的な意味は、この経験的意味フレームにおいて動機づけられる。これに対し、花言葉には、「アネモネ」(→希望)、「桜草」(→初恋)、「牡丹」(→富貴)のように、文化的意味フレームの文脈を考慮しない限り問題の連想のリンクの動機づけが理解できない事例も存在する。これまでの花言葉の研究では、本研究が注目する語彙の経験的意味フレームと文化的意味フレームの区別がなされていないため、花言葉の連想的な意味は、記述的に列挙されるに留まっている。これに対し本章では、以上の二つの意味フレームの区分に基づき、連想が動機づけられている詩的意味とこの種の動機づけを欠く文化特有の詩的意味の相対的な違いを一般的に規定している。

本章では、さらに複数の語彙の〈取り合わせ〉に関わる詩的表現の連想的な意味を考察している。例えば、日本、中国の伝統的な取り合わせの表現 (e.g. 「松と鶴」、「牡丹と鳳凰」) は、それぞれ長寿、富貴 (ないしは吉祥) の概念と連想関係にある。従来の研究では、この種の連想的な意味は記述的に列挙されているが、この種の意味の創発の動機づけは考慮されていない。本章では、複数の語彙の取り合わせを動機づける文脈を、経験的意味フレームと文化的意味フレームに区分し、この二つのフレームの相互作用により、問題の取り合わせから創発される連想的意味を規定している。例えば、「松と鶴」と「牡丹と鳳凰」の場合、常緑樹の松の生命力や牡丹の花の豪華さは、経験的なフレームの文脈で理解可能であり、この文脈で生命力ないしは富貴さが自然に連想される。これに対し、鶴、鳳凰からは同種の意味は必ずしも誘引さないが、日本、中国の伝統的な文化的意味フレームとの関連で、同種の意味が誘引される。この言語表現で重要な点は、構成要素の二つの語彙の文字通りの意味の合成から問題の意味が誘引されるのではなく、構成要素の意味の融合 (blending) によって全体の意味がゲシュタルト的に誘引される点にある。本研究では、この種の意味の誘引のプロセスを、入力スペースにおける構成要素の複数の意味から統合スペースに変換するブレンディング操作によって規定している。

第6章では、認知言語学の観点からみた本研究の意義と今後の展望を論じている。

論文審査の結果の要旨

氏名	段 静宜
論文題目	植物に関する慣用表現の認知言語学的研究 — 日中対照分析 —
要 旨	
<p>本論文は、日中両言語の植物の慣用表現と修辞表現の認知分析に基づいて、言葉と認知のメカニズムの解明を試みた独創的な研究である。</p> <p>従来のこの分野の研究では、植物表現の意味分析は記述レベルではなされているが、主に植物語彙に関する辞書的な意味分析に限定されている。本研究は、植物表現を構成する個々の語彙の意味分析だけでなく、句レベル（特に慣用句のレベル）と文レベルにおける植物表現の意味分析を試みており、分析に際しての体系的性と包括性が認められる。また、これまでの研究では、植物表現の文字通りの意味分析が中心となり、植物表現の創造的意味や修辞的意味の分析は本格的にはなされていない。これに対し、本研究は、植物表現の修辞的意味の諸相を、認知言語学の概念メタファー理論、フレーム意味論、ブレンディング理論、等の枠組みに基づいて体系的に分析している点に独創性が認められる。</p> <p>本研究は、さらに次の点に独創性が認められる。その一つは、メタファー表現の体系的な分析にある。認知言語学を含むこれまでのメタファー研究では、〈構造のメタファー〉、〈方向のメタファー〉、〈存在のメタファー〉の3種類のメタファーの存在が仮定されているが、その実証的な裏づけは十分にはなされていない。本研究は、広範な植物表現の綿密な意味分析に基づき、〈方向のメタファー〉に基づく比喩写像と〈存在のメタファー〉に基づく比喩写像の存在を明らかにしている点が注目される。</p> <p>従来の言語学の研究では、植物の詩的表現（ないしは文学表現）に関する認知的分析は殆どなされていない。これに対し本研究では、認知言語学の視点から、詩的言語における植物の修辞表現（特に、季語に関わる植物の詩的表現）の修辞的意味を特徴づける連想プロセスの諸相を分析している。文学の研究では、詩的言語で使われる四季に関わる語彙は、季語として分類はされているが、個々の季語が起動する季節の意味領域への連想プロセス（ないしは推論プロセス）は明示的には規定されていない。これに対し本研究では、この種の連想プロセスを一般的に規定する認知のメカニズムとして、参照点とターゲットに基づく推論モデルを適用している。本研究では、以上の参照点起動の推論モデルにより、季語が具体的に志向する意味領域への連想プロセスを、参照点からターゲットに至る心的プロセスとして明示的に規定している点に独創性が認められる。</p> <p>さらに本研究では、季語の連想プロセスの分析だけでなく、花言葉に関わる連想的な意味の諸相を、認知言語学のフレーム意味論に基づいて綿密に分析している。従来の研究では、花言葉の連想的な意味は、記述レベルで列挙されるに留まっている。これに対し本研究では、語彙の経験的意味フレームと文化的意味フレームの2種類のフレームからなる意味モデルに基づいて、花言葉の連想的な意味を分析している。本研究で注目する経験的意味フレームは、言語・文化を越える人間の身体的な感覚に根ざす意味フレームである。こ</p>	

れに対し、文化的意味フレームは、個々の言語の背景文脈に関わる意味フレームである。本研究の独創性は、この2種類の意味フレームを区分することにより、詩的言語が喚起する語彙レベルの感性に関わる連想的意味と個々の文化の概念体系に関わる連想的意味の相互関係を明らかにしている点にある。

本研究では、さらに詩的言語における語彙の取り合わせに基づいて創発される意味分析に研究の独創性が認められる。日中両言語の伝統的な取り合わせの表現の意味は、従来の研究では記述的に列挙されるにとどまり、この種の意味の創発の動機づけは考察されていない。本研究では、この種の取り合わせが起動する修辞的意味を、語彙の経験的意味フレームと文化的意味フレームの相互作用から誘引される修辞的意味として規定している。この取り合わせの言語表現で重要な点は、構成要素の二つの語彙の文字通りの意味の合成から問題の連想的な意味が算定されるのではなく、構成要素の意味の融合によって全体の意味がゲシュタルト的に誘引される点にある。本研究の独創的な点は、この種の意味の誘引の認知プロセスを、ブレンディング・モデルの入力スペースにおける構成要素の複数の意味から統合スペースに変換する融合操作によって規定している点にある。

これまでの記述分析を中心とする言語学の研究では、本研究の分析にみられる言語主体の認知能力に関わる参照点モデル、フレーム・モデル、ブレンディング・モデル、等に基づく言語現象の体系的な説明は試みられていない。本研究は、人間の認知能力に関わるこの種の認知モデルに基づく言語現象の記述・説明を試みている点で、理論言語学の実証的研究（特に、認知言語学の分野における実証的研究）に貢献する重要な論文と言える。

日中両言語における植物表現の認知的研究は始まったばかりである。本研究は、（植物表現を構成する漢字の成立過程の分析を除き）主に共時的な視点からみた植物表現の意味分析が主眼となっている。通時的な視点からみた植物表現の歴史的な意味変化の考察は今後の課題として残される。

本論文の分析の枠組みである認知言語学のモデルは、異言語を特徴づける概念構造の違いや発想の違いを解明していく認知モデルとしても注目される。本研究では、この言語文化的視点（ないしは比較文化的な視点）からの分析は部分的な考察に留まっている。この方面の具体的な考察は今後の課題となる。本研究の認知分析をさらに深めることにより、異言語の世界観の違いや文化的発想の違いを明らかにしていくことが可能となる。本研究で得られた知見が、この方面の研究にも重要な貢献をすることが期待される。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	山梨 正明
副査	教授	斬 衛衛
副査	教授	益岡 隆志

最終審査の結果の要旨

氏名	
試験科目	
判定	合格・不合格
要旨	
<p>学位申請者の研究成果を確認し、審査するため、博士論文を中心に口述試験を実施した(2019年6月25日)。</p> <p>申請者は、本研究のための言語学の理論的枠組み(特に、認知言語学の理論的枠組み)を十分に体得し、言語現象の分析に適切に適用している。また、本研究に関連する国内、国外の重要な論文、研究書、等の文献を精読し、その知見を本研究に適切に反映している。申請者は上述の口述試験において、以上の学問的な知識と研究能力を背景に、論文内容に関する理論面、実証面の質問に対し明確にかつ的確に答えることができた。尚、本論文の研究成果の一部は、言語学と言語文化関係の学会誌、紀要、等に掲載され、高い評価を得ている。この点においても、本研究は、言語学の関連学会における学問的水準に達している。申請者の外国語の試験については、日本語により執筆された学位論文と日本語、英語、中国語の要約における高い表現力と理解力から判断し試験を免除した。</p> <p>以上の諸点を総合し慎重に判断した結果、審査委員会は、本博士論文に対し全員一致で博士(言語文化)の学位授与を適格と認め、合格と判断した。</p>	

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	山梨 正明
副査	教授	斬 衛衛
副査	教授	益岡 隆志